

武者小路實篤選集

第十二卷

武者小路実篤選集 第十二卷

青銅社版

武者小路実篤選集

第 12 卷

昭和40年 5月25日 初版発行

定価 六八〇円

著 者 武者小路実篤

発行者 真鍋謙二

本文印刷 三恭印刷株式会社

口絵印刷 京橋原色版印刷所

製 本 石津製本所

東京都新宿区納戸町五番地

発行所 図書出版株式会社 青銅社

電話 二六〇局 八七六五番
振替 東京 三四、八九二番

printed in Japan ©

序

僕は正直に自分の書きたいものを書いて今日まで来れた事を感謝している。孔子の言葉に「学べば禄あり」という意味の言葉があり、勉強すれば食べてゆけるという意味にとり、その意味の深さを感じて、この言葉に感心しているが、僕は僕流に自分の一番書きたい事を書くことで、多くの読者を得、また新しき村の今日のありさまを自分で見る事が出来たことを喜んでいる。正直に自分の本音を吐く事で同感を得たことは当然な事だとも思うが、僕は有りがたく思っている。この本にかかっている新しき村に関係している論文にかかっている精神は今の自分を持ちつづけている。この感想は部分的には今見ると考え不足のところもあるかと思うが、人間同志の関係について、こういう協力の仕方については今でも僕は本当と思ひ、この文章が多くの人からは同感され、新しき村が生まれ、また同感者を多く得られ、どういう生き方が真理にかなう生き方であるかを、人々に知らす事が出来たと自分では信じている。

僕の詩を通して僕の半生を語ったものについては本文が委しいと思うから、別に言う必要はない。

この頃僕も齢をとり、忘れっぽい僕はますます忘れの名人になれば、多くの未知の人から手紙をもらうが、読んだ時は返事を出したい親しさを感じたり、感謝する気になる事もあり、返事をかきたくなる事もあるが、次の手紙を読んだり、日がたつとすっかり忘れて心ならず失礼を重ねている場合がある。始めっから返事をかく気にならない手紙もあるが、何しろますます忙しくしたい事が多いので閉口している。何ものも忘れて一心に仕事をする事が出来る事を僕は一番望んでいる。自分は満八十になったが、これからものになりたいと思っている事に変わりはない。

昭和四十年五月

武者小路実篤

武者小路実篤選集・第十二卷

目次

土地(短篇)

7

新しき村についての感想

38

わが人生

353

——詩を通して見た我が内面生活——

解題……………中川孝

題字・武者小路実篤

土地（短篇）

新しき村についての感想

土地

一

自分は一九一八年十二月の或る日朝早く川岸に出た。清い川の流れば岩にぶつかり、泡を立てて流れている。ある岸の岩の上に自分は立った。自分は顔を洗い、うがいをつかった。そして川向こうの城の土地を見て祈った。

日はまだのぼるのに間があった。そこは四方山にかこまれていた。自分はあたりを見まわした。誰もいない。自分は曉方の空気につつまれた、その清い水と、清い山と、空を見た。自分は跪きたい気がした。自分達の事はこの土地で始められる。神よ守護してくれ、あなたの助けなくしてこの仕事は出来ない。

二

自分はこの仕事を始めようとしてまだ半年たつたかたないかだった。幸運は自分につきまとして、この仕事を

祝してくれた。

世間の人はこの仕事は必ず失敗すると言った。しかし友は信じてくれた。仲間は一人ふえ、二人ふえした。一月たつたかないかに百人以上の熱心な仲間を得た。

東京で始めて仲間にあった時は五六人だった。しかも四度目にあった時は三四十人になった。或る日書留の郵便が来た。あけて見ると千円の小切手が入っていた。

自分達は何かに感謝した。

よき手紙がくる度に妻はよろこんで、自分にとびついた。自分は喜びの上に決心を今更に強めないわけにはゆかなかった。

三

自分達は何をしようというのか、新しき社会をつくろうというのである。そこでは皆が働ける時一定の時間だけ働くかわりに、衣食住の心配からのがれ、天命を全うするためには金のいらぬ社会をつくろうというのだ。その上に自由をたのしみ、個性を生かそうというのだ。

そんなことが出来るか？

出来る！

それが自分達の確信であり、その確信のもとに進もうというのだ。

それには先ず土地が必要である。土地をただにするために、先ず我等は一定の土地を買わなければならない。土地をただにする運動をする代わりに、少しずつでも土地を買って、共同のものにし、ただとただの実を

あげたいと思った。

四

土地をどこにきめるか、それが第一の問題であった。

初め東京から日帰りの出来る所を選ぼうとした。思想上に働くには日帰りの出来る所の方がいいように思えたので、四五カ所よきそうな所を教えてくれた。無理にも気をその方に向けようと思った。しかし何となく心細くなるばかりだった。

大体見当をつけて、参謀本部の五万分の一の地図を買って、よきそうな所を調べてみた。しかし心細くなるばかりだった。

人はそろった。最初に住む人は殆どきまった。そして自分達の内の勢いはますます熟して来た。勢いは自分達をまきこんで、どっかにつれてゆきたがっている。しかしおちつく土地はきまらない。自分は毎日土地のことを考えた。運命によってきめてもらいたく思った。自分の理性は迷信だと思おうとするが、自分はこの仕事がちがっていない以上、何かでよき地を偶然、神から見ても必然であっても、人間から見ても偶然に与えられそうな気がしていた。

近くにいい土地がないときまると、だんだん遠い所でもいいということになった。

正直な話、金さえあればどうにかなる。しかし金はいくら多くっても五千元は超さないのだ。それもあぶないのだ。自分達の住んでいる家が売れるのをあてにしているのだから、それはいつ売れるかわからない。

かかる自分達であつたから、何気なく入って来た千円はなおありがたかった。

自分達の仕事が正しければ、そして運命に甘えすぎさえしなければ金も入ってくるというのが自分の信念であったが。

ともかく土地の安い所を捜さなければならない。

五

北海道ということが第一に頭に起こるのは自然である。しかし自分には北海道は禁物であった。父は北海道で肺をやられて死んだ。それからもう一つは自分の初恋の女がいることだ。

自分はその女のこととは何とも思っていない。しかしその女がいる北海道は自分には禁物なのである。

(説明は他日する。)

しかしそれも自分達の仕事のためとあっては問題にすべきことではない。しかし北海道で仕事を始めるとなれば、大農式にやる必要になり、そして我等には金が不十分だ。この理由も大した理由にならないかも知れない。しかし自分は北海道はどうも気が向かなかった。人がすすめてもあいまいな理由で反対した。

ついで頭にくるのは日向である。

六

その時分、ある人が来た。その人はもう四十をこしていた。方々のことを知っている人だった。その人が日向のことを話した。友達と一緒に日向に住まないと勧められたが、あんまり遠いのでやめた。しかし日向はいい所だそうだった。

自分はそれを聞いた時、遠いなと思った。別に気は動かなかった。しかしその晩急にのり気になり出した。妻ののり気になった。何となくあかるい感じがして来た。

翌日友に話した。友も賛成した。そこで自分は日向にきめた。

日向のどこということはきめられなかった。しかし日向のどこかにしようということはきめた。それから日向に行った人に話をきいたり、本をよんだり、地図を送ってもらったりした。自分はその時、東京から汽車で一時間程はなれた田舎にいたから。

その時、二十万分の一の地図と、五万分の一の地図を一枚ずつ送ってくれた。その五万分の一の地図を見た時、自分達の土地はこの内にあるのだらうと思った。

しかしそう思うのは例の迷信だと思った。しかし事実はその通りになった。自分が立っている川岸はその地図にちゃんとのっている。

七

しかし自分は話を前に戻す。自分は皆に日向に土地をきめたことを話した。東京に残る友達には皆遠すぎると言ってくれた。一緒にくる仲間は皆賛成してくれた。

自分の気になるのは母のことだった。

自分は母の性質を知っている。母はまた自分の性質を知っていてくれる。

母は反対しない、しかし淋しがるだらうと思った。母は運命には従順で辛抱がよく与えられたものを受けとる質で、女のなかでもその点は図抜けている。

「こうきめました」そう言えば、

「そうかい、立派におやり」そう母は言うにきまっている。自己の淋しさによって息子の仕事を少しでも束縛することを母は罪だということを知っているから。

そして自分が一たん言い出した以上はあとにひかないことを知っているから、そして母のことも自分が十分考えた上できめたことも母は知ってくれるから。

「男の子はそのくらい、しっかりしていなければいけない。」

母はそう思つて一方よろこびながら、淋しさに耐えてくれる女だ。

自分はそれを知つていて淋しさを与えることはすまないと思うが、仕方がないと思った。

八

母には八人の子があつたが、皆死んで、自分と兄と、末子二人がのこつただけだ。父は僕の三つの時に死んだ。

その兄もいつ西洋へ行くかわからない。外交官だから。兄が西洋へゆけば六十七の母は十になる孫と二人東京にのこるわけだ。孫がいてくれるので助かるが、孫はまだ相談相手にはならない。世話することは出来ない。自分が電報を見ても四日目ぐらいでないと帰れない所に永遠に住むことになることは何と言つても母には淋しいにちがいない。自分も母のことを思うとつい涙ぐむ。

しかしそんなことを言つていられる仕事を自分にするのではない。

誰をも幸福にしたいために、不幸にしたくないためにこの仕事は始められる。しかしこの仕事が出来るまで